

氏名 土谷 恵

本論文は日本中世の寺院社会の構造を明らかにするとともに、その寺院社会を舞台とする芸能の在り方を究明している。中世の寺院社会は中世社会の縮図ともいえる存在だが、極めて複雑であるとともに、関連する書籍や史料が大量に残されていることもあって、解明は容易に進まなかった。

それは宗教史研究が教学・宗派の研究を中心に進められてきたことにもよろうが、そうしたなかで黒田俊雄氏や網野善彦氏らが寺院の制度や組織構造の研究の意義を説いて以来、飛躍的に研究が進められるようになってきている。土谷氏はその研究の動向に基づいて、醍醐寺を対象に、寺院社会を構成する諸階層の存在形態、ならびに寺院社会で担われた芸能の実態を明らかにすることを本論文で目指している。

全体は二部九章からなり、第一部は醍醐寺の組織と社会の姿を、史料を丹念に読みこんで明らかにしている。第一章では、醍醐寺の頂点にあった座主について、その師資相伝の在り方を指摘した上で、座主が拠点とした房である三宝院の構造を明らかにしている。

続く第二章では、その座主房の構成と醍醐寺の寺家の政所の構成との違いを明らかにしつつ、寺院社会の複雑な制度と人間関係を鋭く指摘している。そして第三章では、座主房の組織と運営を人的関係や空間構成から描き出している。

以上の第一部の分析によって、これまで不明な部分の多かった醍醐寺の寺院構造が明らかにされ、東大寺や東寺などを対象にして進められてきた寺院研究に新知見を追加するとともに、今後の寺院史研究において確かなる地歩を築いた点でも高く評価される。

第二部は、寺院社会の芸能の重要な担い手であった童の存在形態を明らかにするとともに、童舞の芸能の実態を探っている。まず第四章では、寺院史料に見える童について、これまでの研究を鋭く批判し、児・上童・中童子・大童子などの呼称とその身分・出身階層・役割を究明しており、中世寺院の童の画期的な研究として評価されたものである。

続く第五章は、醍醐寺の桜会における童舞を扱ったもので、勝覚が醍醐寺の鎮守である清龍宮の法会として始めた桜会の成立・展開を多くの史料の分析から明らかにし、その法会での舞樂法要における童舞の位置づけを指摘している。説話集や絵巻によく見える桜会とその童舞の様相を明らかにした重要な論考として、多くの研究に引かれている。そして第六章では、その童舞の背景にある童と僧との性愛の世界を究明して、寺院社会の一側面を摘出している。

第七章は、童舞に発して中世の舞樂がどのように行われたのかを、広く舞樂法要の在り方から探り、さらに第八章では、醍醐寺の桜会の影響を受けた天台宗の慈円が、童舞を興隆させるようになった事情を探って、それが後鳥羽院の王権と仏法との相愛を目指したものであったことを指摘している。そして最後の第九章では、絵巻や仏画に描かれている舞

童・天童の図を読み解いて、寺院社会における童の性格と位置とを明らかにしている。

以上の第二部の分析によって、中世の寺院の童の存在形態と童舞の全貌が明らかにされたことで、これまでの童研究は大きく塗り替えられ、また中世の芸能について新たな視点が提出されたものとして高く評価されている。特に漠然と「聖なるもの」として捉えられてきた童の実態を明快に指摘した点は、今後の研究では常に踏まえておかねばならなくなつたといえよう。

こうして本論文は、従来の寺院史研究で不明だった部分を丹念な史料の分析によって実証的に明らかにすることで、寺院社会の研究に新たな方向性を示し、また芸能についても新たな事実と視点を提出したことで、寺院史のみならず文学・美術・芸能史の研究にも大きな影響をあたえつつある。

ただ扱っている対象が、主に醍醐寺で、それも座主房を中心としたものであり、芸能においても童と童舞であるなど、研究対象が比較的限定されており、また深めてゆくべき課題も多いが、本審査委員会は、上記のような顕著な成果に鑑みて、本論文が博士（文学）に十分値するものとの結論を得た。